

箕面手づくり紙芝居 コンクールの終焉

—30年続いた手づくり紙芝居の歴史に幕—

堀田 穰 (京都先端科学大学名誉教授)

2021年7月10日、第30回箕面手づくり紙芝居コンクールの最終審査会があり、受賞者16名が決定されて終了した。昨年はCOVID-19(新型コロナウイルス)流行によって中止だった。さらに、30年続いたコンクールはこれが最終回になることを、主催者である箕面市教育委員会から知らされていた。

最終でもあるので、従来ならば一般の部で受賞経験者がA部門、受賞未経験者がB部門として、A部門ではグランプリ、B部門では最優秀賞が最高賞だったのが、今回は歴代のグランプリ受賞者から作品を募り、第30回特別記念賞を選ぶことにしていた。ちなみに、今年の応募総数は136作品、ジュニアの部35作品、A部門22作品、B部門67作品、そして特別部門には12作品の応募があった。

コンクールの審査とつらいつらいつ

私は第1回コンクールから審査を行って来た、唯一生き残っている審査員であるが、例年この審査はタイヘンなのであった。

1) 予備審査 審査員は作品が保管してある施設に行って一点一点、絵と脚本を見る。光るものを感じられる作品をチェックする。短いコメントも作品毎に書く。

2) 第1次審査 初めて審査委員会として作品をチェックして行く。ここで審査委員会は、第2次審査会で実演してもらう作品を選ぶのだ。ここまでは非公開。

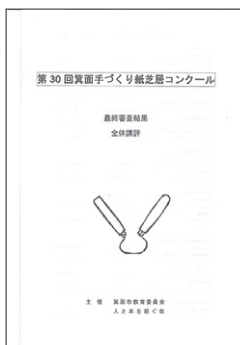
3) 第2次審査 実演審査を行う。作品の作者に会場まで来てもらって実演してもらう。公開審査なので、各地から来た応募者や、箕面市民などの観客の前で演じるのは、初めての人にとっては、たいへんなプレッシャーである。ただ慣れないB部門の上演者にとって、A部門の見事な実演を見ることは、何よりもプラスに働くのだ。

4) 最終審査 第2次審査を生き抜いた作品が賞をめぐって競演する。ジュニアは第2次審査がないので、ここで実演。その家族が観客なのでにぎやかだ。箕面市

箕面市立図書館、NPO人と本を紡ぐ会のスタッフがどれだけエネルギーを使ったか、気が遠くなる。

ところが、今年はコロナ禍である。蔓延防止重点措置で、府外の審査員は審査委員会にはリモート参加でということになってしまった。もともと、第2次審査会、最終審査会と1週間をはさんで2回の実演会があるので、遠方からの応募者は、ビデオ審査の方法もあった。だから、映像を介しての審査はまったく未経験というわけではなかった。けれども、審査委員会そのものの参加がリモートで、となると、かなり隔靴搔痒の感が強かった。そして審査と言え(1)から(4)までと思われているかも知れないが、参加した上演者が、他の上演者の作品から啓発されることも多く、公開審査に伴う緊張感なども含めて、審査委員からのコメントが強く印象に残り、作品に活かされたことも多かったのだ、敢えて(5)、(6)、(7)まで過程に入れてみたのだ。今回はそれらの多くがコロナ禍のせいで雨散

「第30回箕面手づくり紙芝居コンクール」会報



「第30回箕面手づくり紙芝居コンクール」の最終審査結果報告書が送られてきました。主催「箕面市教育委員会・人と本を紡ぐ会」の連名が記載されている。記念すべき会報。

堀田審査委員長・溝手恵里・土居安子・小寺弘之・関純子の5名の委員の講評。みなさん、コロナ禍の中でのコンクールと最終となったコンクールに感じたことを寄せられていた。二編紹介する。

霧消してしまったのである。

コンクルのはじまり

ちょうど30年前、1991年に始まった箕面手づくり紙芝居コンクールだが、それより前、1989年には箕面紙芝居まつりが開始されていた。だから、そこに集まっていた阪本一房さん、小森時次郎さんに会ったのは、さらにそれから数年前だったわけだ。何度も重ねられた紙芝居についての研究会で語られていたのは、新しい紙芝居への予感であり、そのための実験も繰り返し試行されていた。

阪本一房さんは吹田市にあった人形芝居小屋『出口座』（1975年設立）の主宰者で、人形劇の人形操作は体力的に過酷で、紙芝居の演出に力点を变えつつあった。とはいえ、近代人形劇の原点と言える人形座に関わった小代義雄、浅野孟府らが大阪で1935年に設立した大阪人形座に加わった一房さんは、日本の人形劇史の主流に位置付けられる方だった。人形劇と紙芝居は、新興芸術運動に

おいて共通した意識の下に進められたことは、紙芝居についての最古の単行本、久能龍太郎著『紙芝居の作り方』（春陽堂、1933年）を読めば明らかだ。一房さんの「新しい紙芝居」のイメージも、人形劇との親和性があればこそであった。

小森時次郎さんは、街頭紙芝居時代からの阪本さんの盟友だった紙芝居画家。街頭紙芝居画家として独り立ちするために、加太こうじに弟子入りしたりもした。加太こうじ著『落語的味覚論』（産報、1963年）には、加太宅に転がり込んで大阪の味を自慢する小森さんの姿が活写されている。小森さんはまつり、コンクールに集って来た若い紙芝居創作者たちを愛し、自宅で紙芝居画の私塾を開いて、自分の技術を惜しみなく手づくり紙芝居作者たちに伝えてくれた。

コンクルの第1回から審査委員長を務めていただいた中川正文先生の認識も、このコンクルが「新しい紙芝居の学校」であるということと一致していたように思われる。



「箕面紙芝居まつり」冊子

150頁にわたる2021年版『箕面紙芝居まつり資料冊子』。事前に編集期間を要したと思える内容と資料に、30回の手づくり紙芝居コンクール・33回箕面紙芝居まつりの歩みと紙芝居の今とそれを支えたたくさんの方々を感じとれる。

内容も豊富。中川正文先生の「いまなぜ手づくり紙芝居か」は必読論稿。

第1回（91年）からの「手づくり紙芝居コンクール受

「……いくらすぐれた文化だといっても、所詮、レディメイド―既製品の文化でしかありません。そして私たちは、それをただ受けとるだけ―受容するばかりなのです。

こういう非常に偏った文化の状況、歪んだ状況を手なおししようとする催し―それがこのたびのコンクルなのです。

みなさん方の積極的で、のびのびした手づくりの紙芝居を期待しています。誰か別の人が採集した地域の昔話の文章を、そっくり使うなどを一切やめて、たとえ技術的に下手でも、みなさん方のみずみずしい創作をお待ちしています。それが、新しい文化の出発点なのです。」（中川正文「1993 ほんとうの創作を」『ひろがれ紙芝居 箕面手づくり紙芝居コンクール15周年記念』P6、人と本を紡ぐ会、2005年）

箕面手づくり紙芝居コンクルだけが推し進めたわけではなく、さまざまな動きと連動して、街頭紙芝居、教育紙芝居に続いて第3の紙芝居ジャンル、手づくり紙芝居が誕生し

ていったのである。このころの熱気を封じ込めた本として阪本一房・堀田穰共著『紙芝居をつくらう！』（青弓社、1995年）がある。長らく絶版だったが、このところ Amazon を見て、Kindle 版（電子図書）やオンデマンド版（ペーパーバック）になっているのを見つけて驚いた。

高齢者介護紙芝居の登場

2006年遠山昭雄 監修・編著『はじめよう、老人ケアに紙芝居』（雲母書房）という介護関係者と紙芝居関係者による論集が出され、これをマニフェストとして、同書房から高齢者向け紙芝居が次々と刊行された。それは2009年から2019年の10年間、31点に及んだ。その後残念ながら雲母（きらら）書房は倒産するが、この紙芝居出版が原因ではなく、むしろ既存の出版紙芝居にない、高齢者向けジャンルとして特に公共図書館なども、積極的に購入してくれたようだ。戦時下の国策紙芝居を除いて、これまで、子ども向

賞作品と作者一覧」は紙芝居資料としても価値がある。やはりすごい。

本文からこれだと思うものを紹介してみる。

・「未来へつなぐ」

箕面市内の子ども対象に応募作の紹介と論評。近畿圏内の学校単位での応募は2611作品になり、うち箕面市内からは983作品。1回から30回まで披露。

・人と本を紡ぐ会の中心メンバーで、第1回から実行委員長として裏方を担ってきた新井せい子さんの「手づくり紙芝居コンクールのはじまりは」という文章に、万感の思いを感じさせられたので、抽出して紹介したい。

「楽しい活動だと動いた市民、活動を支援して下さった箕面市と教育委員会

け以外の出版紙芝居で、採算があつて軌道に乗ったのは、おそらく紙芝居の歴史上初めてのことだったのだ。

出版不況と言われる中、この快挙を成し遂げた要因の一つに、既存の教育紙芝居の画家や作家よりも、箕面や横浜の紙芝居文化推進協議会の手づくり紙芝居コンクールで育ちつづつあつた紙芝居作家を多く起用したことが挙げられる。監修者であり、編者であつた遠山氏が、箕面や横浜、全国紙芝居まつり等をせっせと巡り、自分の足と目で見つけて来た作り手による、手づくり紙芝居のパワーを活かした作品だったのだ。どう活かしたのか、ということであるが、タイトルページに著者表示がないとか、対象年齢が違ふとか、そういう形式的なことよりも、想定されている関係性が違つたのだ。

2009年のみんなの家+奥田真美 脚本・絵『しよいくらべ』（雲母書房）は「人生紙芝居」という副題がついている。そしてP8の裏に「あなたも人生紙芝居の創り手に

なりませんか」という文章が載っていた。「くれぐれも、絵で躊躇されせんように。『人生紙芝居』は、紙芝居作品ではなく、あくまでも「コミュニケーションツール」なのです。」

みんなの家は西伊豆にある宅老所で、そこへ通つてくる高齢者を相手に奥田真美氏が行つていた実践が「人生紙芝居」なのだ。つまり『しよいくらべ』はその実践の一サンプルに過ぎないという位置付けになる。そして、この紙芝居と対象の関係性は、既存の印刷紙芝居より、手づくり紙芝居が想定している関係性に近いことができる。

「人生紙芝居の主人公は目の前のお年寄りの○○さんです。」

誰か、一般的な観客ではなく、固有の人生を生きて来た○○さんという老人に見せるためだけに作ったのが人生紙芝居なのだ。詳しくは奥田真美著『新しい回想レクリエーション「人生紙芝居」』（講談社、2017年）を参照されたい。これが最も先鋭な意識で成立

との協働で続けてきたコンクールが幕を引くことになり、この30余年の活動で、紙芝居文化を発信し、全国に広げる一助を果たせたのではないかと思います。今までの御参加、御協力ありがとうございました。」

したもののだが、高齢者介護紙芝居には多かれ少なかれ、この関係性が意識されていた。この問題意識を紙芝居作品として創造できたのが、手づくり紙芝居作家たちだったと言える。

演劇・音楽文化一般の危機

大阪文化団体連合会が2021年6月の総会で、9月に解散することを決定した。関西の文化団体、サークルが集まって43年も続けて来ており、箕面手づくり紙芝居コンクールよりも古くから活動していたのに、である。コロナ禍は、演劇や音楽など、対面・ライブ文化に対して本質的な打撃を与えた。もっとも大阪では、2009年の大阪国際児童文学館の大阪府立図書館への統合問題で先駆的に現れていたことではある。地方行政はもう、文化を支えきれなくなつて来ていたのである。

これはイベントだけでなく、公共図書館を維持できなくて指定管理者に委ねるとかの、日常生活に及ぶ段階まで進んでしまつていて、日常生活、市民生活の危機と言つても過言で

はなくなっている。そもそもコロナ禍でこれだけ泡を喰つたのも、保健体制の弱体化、縮小が大きく影響していたのだった。政府だけでなく、私たちの社会の危機管理が弱体化していることを感じるべきだろう。コロナ禍はそれを一気に顕在化してしまつたのだ。部分的にはリモートに代用させたとはいえ、全面的な代替はあり得ない。コロナ禍が終息した後、紙芝居に限らず、演劇や音楽領域のさまざまな分野で模索が続けられるに違いない。関係性への配慮がこれまでの出版紙芝居に变革をもたらしたとすれば、そこに未来を拓く鍵を見出せないだろうか？ 見せたい誰かに見せる、そのために作るという、手づくり紙芝居のスタンスから学ぶべきことはまだ多いのだ。